

保育現場と学問の交流の中で

——一九七八年・お茶の水女子大学児童学科

現職研究会の学びの中から〈その四〉——

長山 篤子

今回は、東京郊外にありますS幼稚園の公開保育で学び合ったことについて報告してみたいと思います。

S幼稚園の公開保育は、同年・六月十三日に実施されました。当日は、梅雨の晴間に恵まれ、S幼稚

園の八十数名の子どもたちは、室内、戸外とバランスよく遊んでいました。その中を六名の保育者が、あちこちに気持を配りながら、チームワークよく移動しているのが印象的でした。この日のレポートを読み返し、三つの視点から保育の状況と討議された



事柄についてまとめ、報告してみたいと思います。

一、ままごとの部屋で出会った

A子ちゃんとB子ちゃんの表現

年長児A子ちゃんとB子ちゃんは、図書コーナーから絵本を数冊もってきて、ピアノの横の机の上に置く。S幼稚園は、子どもの遊びに合わせて、幼稚園全体にいくつかの活動のコーナーを設けている、A・B子ちゃんが入っている部屋は、いろいろなごっこ遊びに必要な道具が置かれており、家ごっこ、お店やさん、うさぎごっこ等のごっこ遊びによく使われている。男児たちの基地の拠点になることも多い、通称「ままごとの部屋」と呼ばれている。図書の部屋は、ホールを挟んだ向いにあり、図書の部屋は、絵も描けるようにセッティングされている。二人の女兒は、図書の部屋から「おさるのジョージ」他の絵本を運んで机の上に並べる。A子

ちゃんはそこから「おさるのジョージ」の絵本を選び、ピアノの楽譜台に乗せる。B子ちゃんは適当なところになると絵本のページをめくる。二人は交替でピアノを弾いたり、ページをめくったりする。そして声をたてて笑い合い、絵の変化に合わせて指の動かし方を変えている。二人の気持が通い合い、とても楽し気であった。

私はこれまで、絵本を見てピアノで表現するといった子どもの行為に出会ったことがなく、感動を覚えた。A・B子ちゃんはこのような表現で自分の心を外に表わしており、何とも新鮮な場面であった。自由な遊びが保障されているS園の保育の一部を垣間見る思いであった。

ゆっくりとした時の流れの中で、この活動をいつまでも保障出来たら良いなあと思っていた矢先、年長男児六名がなだれ込むようにして「ままごと」の部屋に入ってくる。二人の女兒は、男児の動きをしば

らく見ていたが、絵本を閉じ、ピアノを閉めてこの部屋から出ていった。絵本を通し、自分たちの心をピアノで表現しているこの雰囲気は、男児たちの侵入で消えてしまった。

激しい活動の多い幼稚園で、このように自由で、静かな、あたたかい空間がどのように確保されるか大きな問題であると思った。後の話し合いで、保育者はこの状況には気づいていなかったことが判明した。

二、年長男児四人の基地ごっこ

……「先生はうるさい!」

女兒二人が出て行った後、四人の男児が、布団を出したり、ブロックを並べて基地ごっこを始める。ままごとコーナーから卵の型やピンを出して、「サイダーにジュースに、コーラーだ」と笑って飲むまねをする。M夫が、出かける。S夫は、「ジュースが

いっぱいたまっただけど……M夫はおそいなー」と入口の方を見に行ったりしている。M夫が帰ってくる。友達を連れて来る。「O夫が入りたいんだって」と言う。S夫は「うんいいよ」と言いながら「O夫、紹介するぞ。こっちがサイダー、これがコーラーだ」などと嬉しそうに説明をする。S夫は「僕も出かけるとするか」とホールの方へ出かける。次にI夫が入って着て「僕も入れて」と言う。M夫は「どうしようか、ここはもう入れない。誰か一人やめる?」と聞く。I君は口をとがらせて「そんならいいよだ」と言っ出ていく。四人の男児は忙しそうに家を整理する。

テラスの方から保育者がやってくる。保育者が「ここは何のうちかな」と二度聞く。男児たちは忙しそうに働いており保育者に関心を示さない。保育者「なんだかごちそうが沢山ありそうね。キャベツありませんか、うさぎがキャベツをほしがっている

のですが……、O夫は「ない！」とそっけなく言う。保育者は更に「レタスはないかしら、人参でもいいんですけど」と言う。M夫は「そんなものは何もないですよー」と言う。保育者はテラスの方へ去る。M夫はS夫やO夫と顔を見合わせて「先生はうるさい！うさぎなんか関係ないよなー」と言う。O夫は「僕たちの家なのに」と怒る。夜になったことにして男児は眠る。M夫「コケコッコー、朝だ。おふろだよ。朝ぶろだ」等と言ひ朝ごはんも食べる。ホールの入口の方から別の保育者が来る。保育者が「ここは何のうちですか」と聞く。S夫は「ただの人間のうちなのに」とつぶやく。保育者は、ホールの方へ出て行く。M夫「さっきの先生おぼけなんだった、いやなおぼけ、イヌなんかつれて」と苦情を言う。更に、M夫「もつと広くしよう」、S夫「玄関をつくろう」とイスを並べる。遊びは盛んになる。

四人の男児は自分たちの世界を持っており保育者が介入するのは好まなかった。保育者は何か関わりをもってみようと考えたようだったが受け入れられなかった。子どもたちの考えと大きなズレがあったようだった。

三、片づけをめぐって

……「地震だ！」

男児四人の遊びは更に展開する、ホールの方から、「おかたづけ」の音がする。M夫は「うそだよー」と言う。「そうだみてこよう」とホールの方へ確かめに行く。帰って来ると「地震だ、地震が来ました」と家の中のものを足で蹴る。ブロックを少し片づけるが外に出て行く。保育者が年少児と入って来て一緒に片づける。庭の方からM夫たちは見ている、片づけは三十分くらいで終わる。その間四人の男児は庭で追かけっこをして遊んでいた。

*

以上の三つの場面をレポートしました。S幼稚園は先に記しましたように、子どもたちの遊びが豊かに展開されることを願って遊びの環境づくりに力を入れておりました。保育者も、子どもたちにどのような援助をしたらよいか一日の保育の終りには丁寧な検討会も実施していました。

子どもたちが創り出す遊びは、実に面白く一や二の内容は、豊かなものでした。しかし、いずれも保育者の動きやことばかけと子どもの動きにはズレがあるのは明らかでした。一の遊びはとうとう保育者の目に入りませんでしたし、二の遊びに至っては保育者の発言は子どもたちに不満を残しました。更に三の片づけの場面は、十分かけて、子どもたちと共にゆっくり片づけていたにもかかわらず、M夫たちは、片づけに参加することが出来ませんでした。

公開保育の後、S幼稚園の保育について以上のような事が語り合われました。「環境に工夫があり、保育者も子どもの気持を汲もうと、又より援助をしよう」と心を配っている。しかし、このように、子どもも思いとずれてしまう保育をしてしまうことがよくある」……保育をしている誰もが、そんな思いで話し合いをしました。保育は理論から始まるべきではないと言う助言を津守先生からいただきました。子どもの創り出す遊びにしっかりと目を留め、それに応えていく保育者になりたいと心から願いつつ、S幼稚園の学びに感謝しました。

(青山学院幼稚園)